肉筆簡牘資料から試みた作品の表現

中村拓也（大郁）
Takuya（Taiiku）Nakamura

二十世紀初頭より現在に至るまで、続々と発見されてきた秦から漢代の肉筆資料は、考古学・史学は当然のこと、書体変遷の確実な記録として、近代の書法史において最も注目を浴びてきた資料である。多くの資料が発見されることによって字例も豊富になり、作品制作の幅も大いに広がった。

この時代の書のおもしろい点は、漢字変遷の過渡期にあって、筆画の省略や章草の草書的表現、精彩な線の筆致が見てとれることである。石刻の書とは異なる躍動感のある書からは、後に続く書法の美的感覚の萌芽を感じ、線の角度や入筆の筆法、章法など、古代人の工夫と苦心の跡を窺える。

今作「澹月」は、肉筆簡牘資料の中でも近年新出した「清華大学戦国竹簡」、「湖南大学岳麓書院秦簡」など、篆書から隷書に変遷する過渡期にある頃の資料を参考に制作した。「精華大学戦国竹簡」は楚系文字ではあるが、円転のリズム、筆の抑揚を利かせた線、入収筆の多様さが特徴で、今作はその特徴を表現し作品に動きを出そうと試みた。字は「湖南大学岳麓書院秦簡」を参考に、篆書が隷変化する字を用いた。秦簡では、例えば「氵」はすでに省略化され筆写に適した形をとり、「詹」、「月」では行意を認められる。

制作において考慮すべき要素は様々あるが、簡牘資料を見てわかるように、その多くは二千年前には出揃っている観がある。我々は、過去の人々が残し、更に受け継がれた筆法・墨法・章法などの表現を借りて制作していることを自覚し、無暗に新しい表現を求める必要はない。書の現代的表現というのは結局、数ある表現法を現代人の感覚に合致するよう取捨選択、組み合わせることなのだろう。

澹月

35×45.5㎝